

JSL高校生に対する多義動詞の指導効果の検証 —教科書で使用される用法に着目して—



お茶の水女子大学大学院博士前期課程 山下佳那子
kana.04321@gmail.com

1. 研究の目的

- ①多義動詞は、幅広い教科において多様な用法で出現する
 - ②日本語を第二言語とする(Japanese as a Second Language、以下JSL)児童生徒と日本語モノリンガル児童生徒との間に、習得差があることが分かっている(西川・細野・青木 2016; 三浦 2016他)
- JSL生徒を対象に、**多義動詞の指導効果を検証**する

2. 研究の方法

2-1. 対象者

表1 対象者の背景情報

学年と人数	高校1年生から4年生、18名
言語背景	ブラジル(16人)とペルー(2人)
家庭言語	ポルトガル語またはスペイン語と日本語
滞在歴	日本生まれ、または滞在歴10年程度
日本語能力	日常生活での日本語会話は円滑に行える 通常クラスの授業に付いていくのは難しいため、 高校1年時に、日本語能力向上のための日本語授業を受けている (多義動詞の指導は行っていない)

2-2. 対象語と用法

- 教科書で用いられる用法に着目し、JSL中学生の習得状況を調査した、三浦(2016)が対象にした10語のうち5語(とる・かける・ひく・きる・あがる)
- 「教科書コーパス」から用例文を抽出し、辞書で用法ごとに分類

2-3. 実験手順

- ①用法ごとに作成した、**用例カード(図1)**を提示する
- ②用例カード内の動詞に注目させる
- ③すべての用例に**共通する動詞の意味**を答えさせる
※答えるのが難しい場合は、ヒントを与える
※正解は1つではなく、対象者に自由に考えさせた

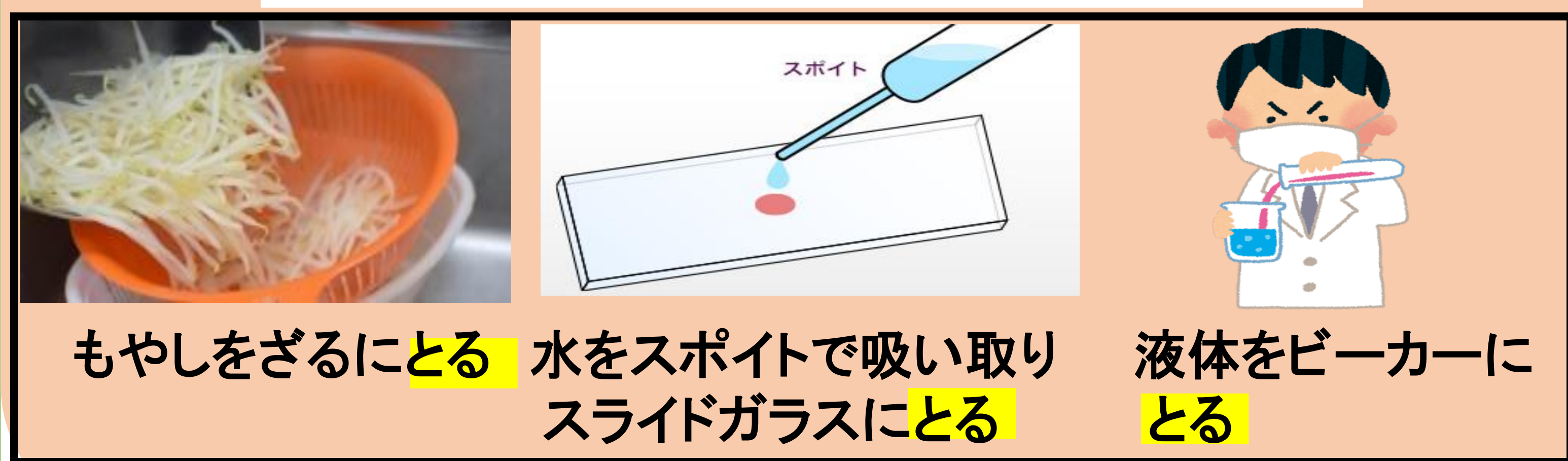


図1 用例カードの例

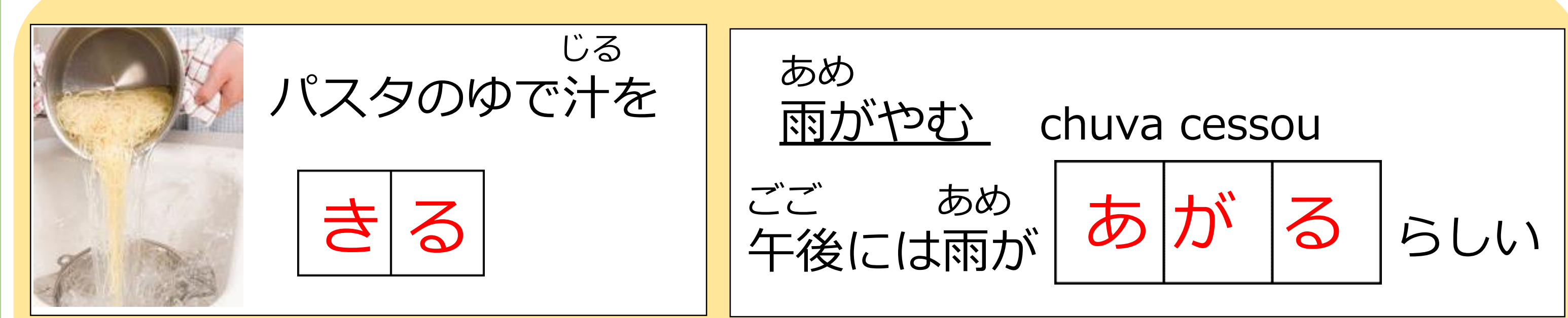
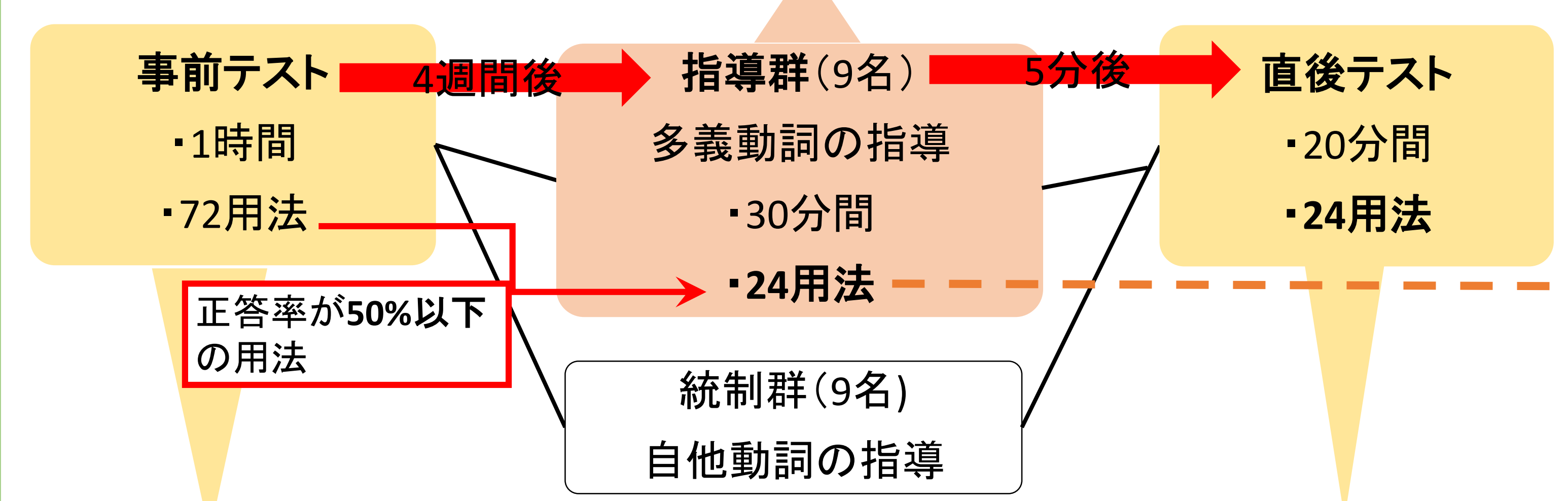


図2 イラストヒント問題の例

図3 説明文ヒント問題の例

※問題文は、事前テストと直後テストで異なる

表2 指導・直後テストの対象となった24用法

語(用法数)	用法
とる(7)	(内閣制をとる)、(皮肉にとる)、(お玉に煮汁をとる)、(点Aをとる)、(指揮をとる)、(学者の道をとる)、(手段をとる)
かける(5)	(なべを火に)かける、(川に橋を)かける、(リボンを)かける、(事件を裁判に)かける、(星に願いを)かける
ひく(6)	(荷物を)ひく、(興味を)ひく、(血筋を)ひく、(汗が)ひく、(田んぼに水を)ひく、(コーヒー豆を)ひく
きる(3)	(肩で風を)きる、(水を)きる、(カードを)きる
あがる(3)	(収穫が)あがる、(雨が)あがる、(人前で)あがる

3. 結果と考察

3-1. 結果1(グループごとの各テスト平均点の比較)

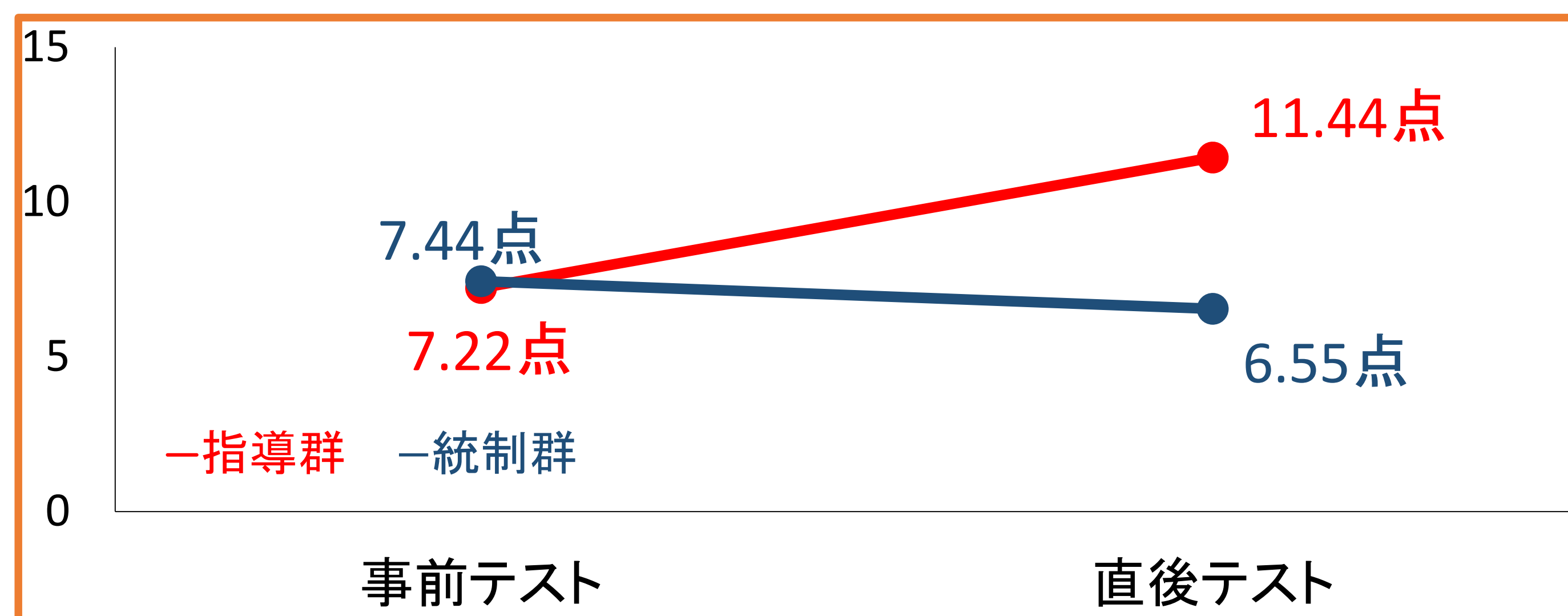


図4 グループごとの各テストの平均点(24点満点)

二要因分散分析の結果

- 指導群: 直後テストの平均点は、事前テストより**有意に高い**($p < .05$)
- 統制群: 直後テストと事前テストの平均点に、有意な差はない

3-2. 結果2(用法ごとの正答率の変化)

(1) 指導効果が見られた用法

(正答率が、事前テストより30%以上上昇したもの)

表3 指導効果が見られた用法

用法	指導群正答率	
	事前	直後
(お玉に煮汁を)とる	11.1%	77.7%
(進路を)とる	11.1%	77.7%
(肩で風を)きる	22.2%	55.5%
(雨が)あがる	22.2%	55.5%
(星に願いを)かける	22.2%	66.6%
(リボンを)かける	22.2%	66.6%
(内閣制を)とる	33.3%	77.7%
(手段を)とる	22.2%	66.6%

派生的用法だが、**実際に行動・経験できる概念**を指す

指導時に、類義語との差異への気づきや概念の理解深化を促すような**フィードバック**を与えた

(2) 指導効果が見られなかった用法

(正答率が、事前テストと同じ、または下降したもの)

表4 指導効果が見られなかった用法

用法例	指導群正答率	
	事前	直後
(事件を裁判に)かける	22.2%	11.1%
(収穫が)あがる	11.1%	11.1%
(なべを火に)かける	33.3%	33.3%
(コーヒー豆を)ひく	44.4%	33.3%
(田んぼに水を)ひく	22.2%	22.2%
(橋を)かける	33.3%	33.3%
(皮肉にとる)	44.4%	33.3%
(興味を)ひく	44.4%	33.3%

学校生活の中で、**行動・経験する機会**があまりない概念を指す

4. 結論

JSL高校生に対する多義動詞の指導は、**効果的**であった
→自然習得では習得が難しいとされる言語項目に対し指導を行うことで**効率の良い日本語指導**を行うことができると考えられる

5. 今後の課題

- 指導効果が見られなかった用法について、指導上の工夫を加えたり、複数回指導を行ったりし、正答率の変化を調査する
- 複数の指導方法を考え、多義動詞のより良い指導方法を検討する
- より年少な児童生徒を対象に、指導効果を検証する

参考文献

- 国立国語研究所「教科書コーパス」国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) <https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search>
- 西川朋美・細野尚子・青木由香(2016)「日本生まれ・育ちのJSLの子どもの和語動詞の産出—横断調査から示唆される語彙力の「伸び」—」『日本語教育』163,1-15
- 三浦香菜子(2016)「中国語を母語とするJSL生徒の語彙力調査—小・中学校教科書で使われる多義動詞に着目して—」『お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科比較社会文化学専攻日本語教育コース平成27年度修士論文』(未公開)